

## 世界トップレベルの研究拠点づくりについて

平成18年12月25日

阿部博之	薬師寺泰蔵
柘植綾夫	本庶玲子
黒田悦彦	庄山優子
原山澤一	金澤一郎

イノベーションを起こすには、その出発点である大学等の基礎研究の機能を格段に高め、国際競争力を強化する必要がある。そのためには、世界トップレベルの研究拠点を、従来の発想にとらわれることなく構築し、世界の頭脳が集い、優れた研究成果が生み出され、人材を育む「場」を我が国に作っていく必要がある。「世界から見える」「オープン」を基本として、以下に掲げる事項を考慮しながら、平成19年度から具体化すべきである。

- 1．世界から注目されている研究者やその集団を核に、「人」を重視して、一定規模以上の拠点形成計画を選定すること。その際、研究者の核が存在する大学等（ホスト）内又はその周辺に中核拠点を設けるが、他の大学や研究開発型独立行政法人等（サテライトなど）との有機的連携や施設・設備の有効活用などにより、拠点全体の機能の強化を図ることが望ましい。
- 2．従来の制度や慣習にとらわれないシステム改革に取り組み、世界トップレベルの研究拠点の構築を行うこと。具体的には、
  - (1) 世界から注目されている研究者を専任の拠点リーダーとし、サテライトも含めた予算配分・人事などの権限を付与するなど、トップダウン的に運営すること。また、拠点の運営については、ホスト大学等の意思決定システムから独立性を持たせるとともに、ホスト大学等は必要な支援体制を整えること。
  - (2) 研究者が研究に専念できるよう、事務部門も含めた強力な支援体制を設けるとともに、英語での研究環境を必須とすること。
  - (3) 業績評価反映の年俸制、研究者の国際公募に取り組むとともに、優れ

た外国人研究者を3割程度以上確保するよう取り組むこと。

3. 分野は、現在、世界トップレベルか、それに近い研究者グループが存在する基礎研究分野とし、当面、原則として、以下の分野間で複数にまたがる融合領域の開拓を目標とするものを選定すること。なお、達成目標については、引き続き、総合科学技術会議の検討も踏まえ、例示すること。

(生命科学、化学、材料科学、電子・情報工学、精密・機械工学、物理学、数学)

4. 研究拠点としては、一定の規模を維持した上で、適切な数を確保すること。

5. 研究面及びシステム改革面での達成目標(中間的なものも含む)を明確化した上で、10～15年程度を目途に拠点形成を図ることとし、5年毎に、国際性にも留意した評価を行うこと。

6. 文部科学省は、委員会を設置し、総合科学技術会議と十分な調整を行いつつ公募要領・選定基準を作成した上で、拠点形成構想を選定すること。その際、外国人有識者の意見を反映できる体制にするとともに、以下のような外形基準を応募時の要件に取り入れるなど、選定基準の明確化を図ること。

(例えば、論文被引用数が世界トップクラスである、分野を代表する国際学会での基調講演や有名レクチャーシップの招待講演・国際賞の受賞などから国際的な影響力が高い研究者と認められ、また、十分な競争的資金を獲得可能なレベルの高い研究者が、その拠点の教授・准教授クラスの大部分を占めること、など)

7. ホスト大学等の財政面を含めた応分の支援・援助やシステム改革の推進を確実に担保するため、拠点形成構想の責任者である拠点リーダーとホスト大学等の長との連名で応募するとともに、拠点リーダーによる提案内容について、ホスト大学等は、最大限尊重するよう努めること。

なお、本事業は、先導的なモデル事業として実施するものであることから、その成果や取組については、他の研究機関にも広めていくよう努めるべきである。